

一人一人に寄り添いあたたかい指導の実践について

不登校生徒の状況

- ・昨年度開室した校内別室には登校できるようになった。
- ・登校機会が増え、校内別室ボランティアの学生とコミュニケーションがとれるようになった。
- ・登校した時に校内別室で他学年の不登校生と給食を共に食べられるようになった。

具体的な取組

○校内別室の設置

- ・教室復帰を目指す、ステップとして校内別室を開室した。
- ・生徒間のより良い人間関係を築くために、道徳や学活の時間を利用してエンカウンターを取り入れている。

○各学年のエンカウンターの取組

- 1年：私のしたいこと Best5!
自己開示による自己理解を深める。
- 2年：サザンクロス探検隊～宝探し！
口頭で説明し合い、他者を理解する。
- 3年：砂漠からの脱出！
話し合いを通して合意形成を学ぶ。

○校内の別室指導

- ・登校することへのハードルを下げる。
- ・教室に戻ることを無理強いしない。
- ・自分のペースで学習できる場とする。
- ・教職員や地域ボランティアと一緒に給食をとることで、家族以外の大人と気軽にコミュニケーションがとれるようにする。

○校内別室運営の工夫

- ・誰が登校し、誰が対応しているか職員室で把握できるパネルを設置した。
- ・個別で学習できるパーティションの設置とみんなで
団らんで
共有スペース
を確保した。



成果

- ・登校機会が増え、校内別室に来てくださるボランティアの学生とコミュニケーションがとれるようになった。また、他学年の不登校生徒と給食を食べられるようになった。
- ・他の教職員とのコミュニケーションの機会が増えた。

課題

- ・別室指導では「教職員の負担を増やさない」「教室にいる生徒をおろそかにしない」ためにも人材の確保が必要である。
- ・課題に対して、様々な教材を準備する必要がある。

不登校対応教員を中心にした対象生徒への組織対応

不登校生徒の状況

対象生徒（1年生）は、感覚過敏等の特性により、学級集団や学校生活に適応することが困難であり、小学生の時から継続して不登校傾向にある。本校へ入学後は、試行錯誤を経て、2学期から校内支援教室への登校と適応指導教室を併用して安定的に登校している。また、SSWや教育相談室も本人・保護者に関わり、相談的対応と登校支援を行っている。・昨年度開室した校内別室には登校できるようになった。

具体的な取組

○校内別室での過ごし方

当該生徒は、校内別室では、主に一人で学習しているが、教員や支援員、他の生徒等と話しながら給食を共に食べるなどの交流もしている。



○登校記録の活用

当該生徒が下校前に「登校の記録」を担当に提出し、励ましのコメントを記入するようにした。



学年・学期		月		日		曜日	
学年	1	学期	1	月	1	日	月
学年	1	学期	2	月	1	日	月
学年	1	学期	3	月	1	日	月
学年	1	学期	4	月	1	日	月
学年	1	学期	5	月	1	日	月
学年	1	学期	6	月	1	日	月
学年	1	学期	7	月	1	日	月
学年	1	学期	8	月	1	日	月
学年	1	学期	9	月	1	日	月
学年	1	学期	10	月	1	日	月
学年	1	学期	11	月	1	日	月
学年	1	学期	12	月	1	日	月

○不登校対策委員会を開催（月1回）

出席者：校長、副校長、不登校対応加配教員、担当教員3名（各学年1名）、養護教諭（特別支援教育コーディネーター）、SC、SSW、学習支援教員、通常学級支援員

内容：情報共有、ケース会議、校内支援教室運営に関すること、など

○教育支援センター・SSWとの連携

- 1 校内支援教室や教育支援センターでの様子、過ごし方などを定期的に共有している（学級担任、不登校対応加配教員、管理職）
- 2 家庭のサポートに関することは、SSWや区の教育相談担当者が対応しており、学校との情報共有を密に行っている。（管理職が窓口）

成果

不登校対応加配教員が主となり関わった結果、本人が安心して通える居場所ができ、登校日数が倍増した。（11月は登校日数20日のうち、学校2日、適応指導教室8日の計10日）また、担任が一人で対応を抱え込まずに、組織的に対応することができた。

課題

- 1 学習保障
- 2 本人にとって安心できる学校、学級づくり
- 3 教員の相談的対応の向上（研修、OJT等）
- 4 家庭とのつながり方